2020.07.12

松沢哲郎のこと（1）

小嶋祥三

6 月 26 日に、松沢哲郎らの研究費不正使用に関する、京大本部の調査結果が公表された。松沢ら 4 名の教員が不正行為を行ったという。4 名の中には、不正を認めていない者がいるそうなので（恐らく、それは松沢だろうと推測する）、最終的な決着は先のことかもしれない。しかし、京大本部の調査結果には、それなりの重みがあるので、この件に関係して、松沢哲郎について感想を述べることにした。

不正の発端は、霊長類研究所（以下、霊長研）の大型のチンパンジー用ケージだったようだ。わたしが研究所を訪問した時に、松沢本人がケージを案内してくれた。彼は、研究所は変わったでしょう、と問いかけてきた。わたしは適当に返答したように、記憶している。わたしは『研究テーマの栄枯盛衰』で書いたように、学会、世間をにぎわせた研究テーマも 30 年もすれば衰退？沈静化？する、と思っていた。したがって、「バカデカイ」ケージが無用の長物にならなければいい、と内心危惧していた。むしろ、研究所からの素晴らしい眺望が損なわれたことを、残念に思っていた。

松沢は、チンパンジーには緑が必要と思ったのか、ケージの周囲に樹を植えた。わたしもそれには賛成だ。ただ、松沢が植えた樹が大きくなり、京大の象徴である玄関前のクスノキを圧迫しているように見え、それを残念に思っていた。わたしは、霊長類研究所 50 周年の記念文集に『玄関前のクスノキ』を書いたが、その内容は、わたしの退職後、霊長研で起こった制度上の変化に対する不安が含まれていた。京大の自由の学風が損なわれてしまったのではないかと、クスノキを眺めて思ったのである。

わたしが松沢哲郎に初めて会ったのは、彼が霊長研の心理研究部門の助手（昔の職階名で）に採用され、赴任前に研究所に来た時だった。わたしは覚えていないが、当時、研究所にあった食堂「鳥ふじ」で、彼にうどんをごちそうしたそうだ。わたしが覚えているのは、彼が普通の人は履かないゴツイ靴を履いていたことだ。それは登山用の靴だったかもしれない。当時、わたしは彼が京大の「学士山岳会」に所属する山男であることを知らなかった。

松沢は優秀、有能、リコウだった。彼が霊長研に赴任してそれほど時間が経っていなかったと思うが、彼は oddity の手続きで、サルの視空間の異方性を調べる実験を行った。垂直、水平方向の線分の傾きの弁別が、優れていることを示そうとしていた。その実験の最中に、Science 誌に類似の実験の結果が報告された。それは彼にとって残念なことだったが、彼の優秀さはこの一事でも分かった。

以下はわたしの松沢についての感想である。彼は自分の優秀さを自覚していた。そして、これからが彼の特徴なのだが、それにふさわしい事実（見栄えと言ってもいいか）が必要だ

と考えていたように思う。とても強い名誉心と言っていいだろう。つまり研究者なので、自分の研究が注目され、称賛されるべきだと考えていたのではなかろうか。ある時、研究の価値が話題になった。彼は発見した新しい事実だけでなく、美しさ？も重要だと述べた。一般の人の注目を集める必要がある、ということにつながるだろうか。これは、研究成果の納税者への還元、という文科省の方針に合致していたように思う。

松沢は自分の研究が優れたものであることを、多くの人の注目を集めるべく、積極的に広報していたように思う。彼は賞に関して非常に強い欲求を持っていた。多くの研究者にとって、賞や研究費は目的というよりは結果だろう。しかし、賞に対する欲求が強すぎたのだろうか、松沢にとって賞や研究費は研究の目的だったように、わたしにはみえた。彼は研究の価値は受賞の数、研究費の額で評価されるべきと考えていたのではなかろうか。これも研究費は自分で稼げという文科省の方針と一致している。

松沢の賞に対する強い欲求は、別の面にも現れた。実験殺を伴う実験に否定的だった松沢が、実験殺実験なしではやっていけない日本神経科学学会から、何かの賞を受賞したのには、多くの人が驚いた（そして、受賞後は相変わらず実験殺の実験に否定的な意見を述べていたようだ）。また松沢は、わたしと彼の共通の師である室伏靖子先生（旧姓で）を、日本心理学会の国際賞特別賞に推薦した。室伏先生は受賞されたが、先生が賞に無関心であり、むしろ晴れやかなことは避けるご性格なことは、身近にいればわかっていたことと思う。「文化功労者」は彼が得た最高の栄誉だが、それも今回のことで汚してしまった。

しかし、賞や研究費を得ようと努力することは、より一般的に、栄誉を得ようとすることは、なんら悪いことでない。わたしは彼があくせく、ドタバタしなくても、それなりの栄誉を受けることは可能だったと思う。優秀な人で、それを表に出さない人はいくらでもいる。松沢の行動は彼の性格、特徴によるというほかない。彼はいつから道を外れていったのだろうか。今回の件の京大本部の調査期間は 2011 年 6 月から 2020 年 3 月である。わたしは 2003 年に研究所を離れているので、問題が起こった時には研究所にいなかった。したがって、細部については十分な知識を持っていないことをお断りしておく。